

## 来日後の文化接触が日本語学習者の日本認識の修正に与える影響について —インタビューによる質的調査を中心に—

趙 琳<sup>1</sup>

### **Correction of cultural perception of Japanese learners influenced by cultural contact after visiting Japan: Focused on qualitative survey by interview**

ZHAO, Lin

#### **Abstract**

This article examined the influence of cultural contact after visiting Japan on perception of Japanese culture, for learners who majored in Japanese at Chinese universities. Japanese learners who study at Chinese universities acquire knowledge on Japanese culture through Japanese education at universities, in which they contact Japanese culture through media, Japanese teachers, and so on. While their perception of Japan formed there is gradually modified by some factors, we can predict that the impact of cultural contacts in a wide range after coming to Japan will be great among them.

In order to clarify to what extent the impact of the deepened cultural contact on learners' correction of Japanese perception has been exerted, I conducted two-step qualitative survey which is composed of preliminary survey and main survey by interview for learners who have experience of visiting Japan.

From the results of the survey, we can see that there is a particular influence on perception of interpersonal relationships such as "hierarchical relationship" or "ambiguity", school life and a part of social life. In addition, I verified the results of previous research such as such as "kindness". I also found out relationships with staying days and Japanese learning, and effects of learners' own culture which is reflected in differences in perception and cultural change of learners themselves.

This article supplemented the shortage in the quantitative survey, presented opportunities and processes for transformation of perception through concrete examples, coupled with the contents of the inputs before coming to Japan, and examined the cause of transformation in each case from the angle of differences between Chinese and Japanese culture, individual factors, and so on.

**Keywords** : cultural contact, perception of different culture, case study, Japanese language education

#### **日本語要旨**

本稿では、中国大学で専攻日本語教育を受けた学習者を対象に、来日後の文化接触が学習者の日本文化認識に与えた影響について考察した。中国の大学で日本語教育歴がある学習者は大学の日本語教育で日本文化知識をインプットされ、メディア、日本人教師などを通して、日本文化と接触してきた。そこで形成された日本に対する認識は、次第に修正されるが、とりわけ来日後の広い範囲での文化接触が与える影響が大きいと予測できる。その一層深化した文化接触が学習者の日本認識修正に具体的にどのようにどの程度の影響を与えたかを明らかにするため、訪日経験を持っている

---

1 山東師範大学外国語学院日本語学科 講師

学習者を対象に予備調査、本調査の二段階に分けてインタビューによる質的調査を行った。

調査の結果から、「上下関係」や「曖昧さ」など対人関係、学校生活や社会生活の一部に関する認識に特に影響が出ていることがわかる。また、「親切さ」のように先行研究の結果を検証できたものや、滞り期間や日本語学習との関連、さらに自文化の違いから認識の相違や自文化の変容など「自文化」を反映している内容も新たにわかった。量的調査で不足している点を補い、具体的な事例を通して認識変容の契機や過程を提示し、来日前のインプットの内容と結びつけて考察したほか、各事例をめぐって中日文化の違いや個人要素などの角度から変容の原因を検討した。

キーワード：文化接触、異文化認識、事例、日本語教育

## 1. 研究目的と背景

### 1.1 研究目的

国際交流基金2015年度日本語教育機関調査結果によると、中国における日本語学習者数は953,283人で、そのうち大学などの高等教育機関の学習者数は625,728人で、全体の65.6%を占めている。当調査結果では、中国における教育段階別の状況について、学部レベルでは日本語専攻<sup>2</sup>、非専攻第一外国語、非専攻第二外国語に分類される。そして、大学入学時に日本語をゼロから始めて、3年次に日本語能力試験N1に達するものが多い。全体的に研究志向よりも実利志向（ビジネス、観光等）が高く、卒業後は日系企業に就職する学生も多いことが当調査結果でわかる。一方で、日本学生支援機構（2017）は、毎年「外国人留学生在籍状況調査」を行っており、平成29年度外国人留学生数は約267,000人であり、出身国（地域）別留学生数は中国人が約107,000人と全体の40%以上を占めていると報告している。

本研究では学習者の大多数を占める中国の大学で日本語専攻教育を受けてきた専攻学習者を対象に観察、分析を行う。これらの専攻学習者はどのような背景で教育を受け、日本語専攻教育の効果はどうかについて、先行研究では次のように指摘している。見城・三村（2013）は日本語専攻生、日本語学習生、日本語非学習生1,452名に対し「日本」イメージを尋ねるアンケート調査で、「日本語を学んでいない学生の回答は、戦争の記憶をめぐるのが多かったが、日本語学習をしている学生は日本の現代文化・社会に関心を持ち始めていき、日本語専攻生に至ると伝統文化を含めた知識の質が増加していく傾向がある」（見城・三村2013：55）という結果を得た。さらに、「中国に居住している学生たちの日本認識の範囲は、日本語専攻生を中心にそうとう広い分野に及んでいることも明らかになった」（見城・三村2013：55）と指摘した。日本語専攻生と非専攻生との日本イメージをめぐる違いが明白であることから、日本語専攻教育が学習者の日本に関する認識の形成に果たしている重要な役割が伺える。

日本語専攻教育を受けてきた専攻学習者の習得プロセスを辿ると、次の特徴が見られる。まず、大学の日本語専攻教育で日本文化に関する知識をインプットされ、メディアなどを通して、日本文化と間接的に接触し、あるいは周りの日本人教師や交流イベントなどで会う日本人と限られた形で日本文化と直接的に接触する。そして、これらの接触を通して、ある種の日本に対する認識が形成され、次第に修正されていくと予想できる。さらに実際に日本を訪れ、生活

2 本稿では中国の大学における日本語を専攻とする教育を日本語専攻教育で統一する。

する形になると、広い範囲での文化接触が避けられない。その広範囲の文化接触が専攻学習者の日本に対する認識の修正に具体的にどのような影響を与えたかを明らかにするのが本研究の目的である。

## 1.2 背景

中国の日本語教育の背景をふりかえってみると、1970年代の日中国交正常化から90年代にかけては、日本語の基礎知識の伝授、言語技能の訓練が教育の中心だったが、90年代後半から、日本の文化知識を獲得し、文化理解能力も求められるようになってきた。中国の大学における日本語専攻教育の教育目的やカリキュラムの設定、教育方針を定めるために、中国国家教育部が学習指導要領として『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』を作成し、出版したのが1990年である。その後、新たな需要に対応した改訂版は2001年に『高等院校日語專業基礎階段教学大綱（修訂本）』（大連理工大学出版社2001）として出版された。また高学年を対象とした『高等院校日語專業高年級階段教学大綱』（大連理工大学出版社2000）も出版された。基礎段階の「教学大綱<sup>3</sup>」の前言では、「21世紀の日本語教育の重要な目標」として日本語運用能力とともに「文化を超えてコミュニケーションする能力の養成」を掲げ、新世紀の人材が備えるべき「文化理解能力」を養成するため、新たに「社会文化」の項目を教育内容に加えたとしている。中国では国家の認定を受けた本だけが大学の教科書として使用できることになっており、日本語専攻教育はこの指導要領のもとで行われているので均質性が見られ、地域差および大学間の差が小さいことが特徴である。なお、当「大綱」で見られる「社会文化」および「文化理解能力」の表現は中国における日本語教育を論じる文献で多数見られるため、本稿でそのまま使うことにする。

## 2. 先行研究

グローバル化に伴い、世界的に海外へ留学する学生が増えているなか、来日している中国人留学生の数も高い水準で推移し、日本における留学生の出身国別で最多の40.2%を占めている。これを背景に、中国人留学生を対象に行われた研究が蓄積されてきた。そのうち、異文化適応に焦点を当てた研究が多く、対ホスト国（日本）のイメージが留学生の適応度に大きな影響を与えることが指摘されている（葛1999；2003；孫2013；小松2016）。

さらに、日本に滞在している中国人留学生は日本や日本人に対してどのようなイメージを持っているのか、さまざまな観点から研究が蓄積されている。対日イメージの研究では、社会、文化、経済、政治、歴史など日本全体に関するイメージと日本人への印象など日本人一般に関するイメージが調査されている（安2010）。さらに、中国人留学生を対象とした調査に関しては、歴史教育と日本人イメージの関連についての研究がなされている（鄭2008）。また、メディアと日本人イメージの関連についての研究も見られる（李2006；楊・橋元2010）。

日本語教育の分野では、中国で行う「日本事情」教育と異文化イメージの形成について論じるものが多数見られる（見城2007；見城・三村2013）。見城（2007）は、「中国国内で日本語を

3 中国語版の内容を訳して引用している。

専攻する大学生の日本イメージは、『桜』『富士山』また戦争などに関わる『歴史認識』だけでなく、それ以上に日本の現代社会・文化などの多方面に広がっている」(見城2007:1)と指摘し、学習者の日本認識の形成に焦点を当てた。そのようにできた日本認識の成り行きについて「現実の『日本』にいかにか刷り合わせ、どのような軟着陸を図っていくのか」(見城2007:16)と課題の形で論文の最後に指摘している。

一方、中国の大学日本語専攻学習者をめぐる研究としては、夏(2010)は中国における日本語専攻学習者を対象に質問紙調査を行い、専攻学習者の持つ日本人イメージと学習動機について人的交流、異文化接触と日本の大衆文化が学習者の日本人イメージ形成に肯定的影響を与えていることを指摘した。今後の課題として「日本人との接触を取り上げ、インタビューによる質的調査を行う」(夏2010:120)と明記した。また、張(2013)は日本語専攻の中国人大学生における異文化と向き合う態度に見られる特徴を質問紙調査を通して検証し、「日本語専攻の学生は学年の上昇に伴い、日本や日本人に対する認識が多面的・複眼的になる」(張2013:112)と結論づけた。その上、「学習者の態度や認識の変化が何をきっかけにどのようにもたらされたのか、変容の原因と過程を明らかにするためには、インタビューなどの質的調査が求められる」(張2013:112)という課題を出した。

上記の先行研究においては、中国人留学生全般を対象にするものが多く、大学で日本語専攻教育を受けてきた専攻学習者の特徴が無視されているものが多い。また、専攻学習者を対象に行う研究では、日本人イメージ・異文化態度など日本に関する認識の形成に焦点を当てたものが目立ち、来日後何をきっかけにどのように変容するのかについては質的調査の必要性が指摘されたものの、それにあたる実証的な研究は見当たらない。さらに、中国における学習歴と来日後の認識の修正との関連をめぐり研究結果は見当たらなかった。

### 3. 調査方法

調査は本調査と予備調査からなっている。

#### 3.1 予備調査

まず、文化のインプットの原点となっている日本語専攻教育において「文化」にかかわる科目の実態を把握するため、2017年9月に中国の山東省済南地域にある9大学の日本語学科の日本文化関連科目の設置情報を調査した。調査の結果から、済南市において日本語専攻を開設している9大学のうち、少々差が見られるが、すべて日本事情全般を扱う「日本概況」の授業を設置しており、一部は「日本概況」のほか「日本の社会と文化」など文化関連の授業も設置していることがわかった。

次に、留学経験のある13名の日本語専攻の大学生を対象に日本文化の認識に関して予備調査を行った。13名のうち1年間の留学経験者は7名、1ヵ月以内の短期間の経験者は6名であった。「日本人と言ったら、『優しい』という言葉をまず思い浮かべるが、実際に日本で生活してみて、前の極端な印象が客観的になってきたと思う」、「日本語の勉強を通して、日本語は曖昧だという知識を持っているが、実際の生活で体験してみてもやはりその度にびっくりした」というように、学習者は来日前の認識と照らし合わせ、確認や新たな発見、客観的になったなど認識修正の多様性が伺える。

### 3.2 本調査

同年10月から11月にかけて鹿児島大学に在籍する中国人留学生14名と九州大学に在籍する中国人留学生2名を対象に来日前後の日本認識についてインタビュー調査を実施した。対象者は全員日本語専攻学習歴がある。対面インタビューの所要時間は20分から40分程度で、相手の同意を得て録音した。質問は基本情報以外、日本の滞在歴、日本文化の習得ルート、来日前の日本認識と来日後の日本認識など全部で10項目だが、必要に応じてさらに詳しく質問することもあった。特に、来日後の認識について思い思いの印象的なエピソードを中心に語ってもらった。インタビューは中国語で行われ、筆者によって文字化し日本語訳をつけた。

表1 面接対象者の構成

項目	構成		
性別	男性：3名	女性：13名	
年齢	最大：37歳	最小：20歳	平均：26歳
日本滞在歴	最大値：48ヶ月	最小値：2ヶ月	平均：21ヶ月

表2 対象者情報

名前	性別	年齢	滞日期間 (ヶ月)		名前	性別	年齢	滞日期間 (ヶ月)
A	女	37	36		I	男	31	15
B	女	25	48		J	女	25	48
C	男	24	18		K	男	34	2
D	女	22	13		L	女	22	2
E	女	25	6		M	女	20	8
F	女	30	30		N	女	24	2
G	女	24	30		O	女	24	24
H	女	25	30		P	女	23	18

※滞在期間は調査当時のデータによる。

対象者16名のうち、中国南方の都市の出身者3名を除き、大多数は北方<sup>4</sup>の出身である。また、対象者は学習期間の個人差があるが、中国の大学において日本語専攻教育を受けた共通点を持っている。前述で触れたように、中国の大学における日本語専攻教育は均質性が高いため、各大学の学習プロセスや学習内容の相似性が高いと言える。なお、対象者は来日後大学で留学生生活を送っているため、大学内およびアルバイトで日本人と接する機会が多いことが考えられる。

### 4. 来日前のインプット

日本語を専攻する学生は大学4年間でさまざまな日本文化に関する知識をインプットされ、日本に対する認識を蓄積されていく。インプットのルートは主に教科書、日本語の授業、教師となっているが、マスコミを通じた大衆文化の影響も無視できない。

4 長江を境に中国を「北方」「南方」に分ける発想は中国では一般的であり、日常会話において『北方』『南方』という概念はしばしば社会文化の違いを含意して語られる。

#### 4.1 教科書によるインプットの例

中国の大学における日本語専攻生向けの講義は基礎段階（1・2年次）と高学年段階（3・4年次）に分けてある。各大学間に少々差が見られるが、基礎段階において、一般的に「精読」「聴解」「会話」などの講義が設置され、言語能力の養成を目的としている。高学年段階では、「精読」「翻訳・通訳」「日本文化」「日本語概説」などの専門学習が特徴である。学生の社会・文化への理解能力を育成するという大きな目標のもとで行われてきた日本語専攻教育において、「文化」の要素が教育の全般に影響している。

まず、教科書に沿って授業を進めるのが一般的なやり方とされている教育現場において、教科書は無視できない影響力を持っている。例として、『総合日語』（1～4冊）（北京大学出版社）という教科書を取り上げる。この教科書は日本語専攻学科において時間数のもっとも多い主幹科目の「精読」に使われ、中国第15次5ヵ年計画国家級教材に指定されているため、日本語専攻を設置している大学で広く採用されている。教科書の特徴の1つとして、「異文化摩擦の現実を会話文に取り入れ、学習者に問題を投げかけた」（阪田・守屋2008）と編集者（阪田・守屋）が指摘している。

次に、『総合日語』第3冊（2年生向け）第7課のユニット1「ギョーザにりんご?!」を例として教科書の内容を具体的に見ていく。全文を引用するのは冗長であるため、概要のみを以下に示す。

中国人留学生の劉さんが自分手作りのギョーザを大家さんに持って行ったら、その場でお返しとしてりんごを3個もらった。その話をめぐって、留学生の間で議論が続く。当事者の劉さんは「まだギョーザ、食べてもないのに、お返しって言われてもね…。物々交換じゃあるまいし」と意見を出す。韓国人の朴さんは「なんだか誠意が感じられないね」と述べ、タイ人のチャリヤーさんは「タイにもお返しの習慣があるよ。まあ、すぐには返さないけど」と意見を述べる。また、朴さんは「自分がホストファミリーのお母さんにお土産をあげたら、さっそく次の日にお返しをもらっちゃった」と話した。

そのとき日本人の三好さんが入ってきて、話に加わった。事情を告げられ、意見を聞かれた三好さんはどこもおかしいことなく、日本では普通にある話で、自分のお母さんも近所の人から何かもらったなら、必ずお返しをしていると言った。「もらえばなしは失礼だし。それに、お返しせずにはいられないんじゃないかな、日本人って…」と三好さんが説明する。王さんの「でも、一所懸命作ったギョーザに、りんご、たったの3個っていうのは、ちょっと…」という意見に対し、三好さんは「あんまり立派なお礼をしたら、かえって相手の負担になるし…。そのくらいがちょうどいいんじゃないかなあ」と説明した。

異文化摩擦から異文化理解を深めるための内容であるが、専攻学習者がどのように受け止めているのかはとても興味深い。筆者がこの度のインタビュー調査で、『総合日語』を使って中国の大学で日本語を専攻していた1人は自らこの「りんご」の話を「義理人情」と関連させて取り上げたが、詳細は後述する。

この項目で取り上げられている「義理人情」のほか、「上下関係」「集団主義」なども定番の日本人論の内容として、日本語専攻教育でよく取り上げられている題材である。訪日経験のない学生のインタビューでは「日本人の先生から目上に使う言葉遣いの問題を指摘されたり、注意されたりしている。また、教科書の会話文には、職場で課長など目上の人に使うことば遣いの内容がよくある。やはり、日本では上下関係が厳しいかな」との声があり、ちりばめられている知識から、学習者の頭で日本では「上下関係が厳しい」という結論に至っている。日本語の学習を通して、さまざまな形で知識がインプットされ、それらの知識が統合され日本に対する認識が構築されていくことが示唆されている。

## 4.2 大衆文化の影響

一方、先行研究では、日本のアニメ、ドラマ、歌といった大衆文化への憧れが日本語学習の動機になり、そこから日本に対する親近感が生じ、さらに日本人イメージ形成に肯定的影響を与えていることが指摘されている（夏2010）。筆者の経験としても、アニメや映画、ドラマの視聴はよく見られるが、それ以外に、インターネットを通してファッションや最新の情報を手に入れる学生も見られる。「日本のことをジャンル別に詳しく紹介するブログを日常チェックしている。それで学校の勉強でできたうっすらとしたイメージが次第にはっきりしてくる気がする」と述べる学習者が存在した。こうした事例には個人差があって、一般化することはできないが、一部の学習者における日本の大衆文化に対する熱意が感じられ、授業以外でも学習者が各自で認識を深めている可能性が伺える。

日本語専攻教育でインプットされた文化知識は類似性が見られるが、そのほか学習者の個人差も無視できない。これらの情報が統合してできた日本認識は来日後にそれぞれどのように変容するのかはインタビューを通して詳しく見ていく。

## 5. 事例と考察

本調査で16名の日本語専攻学習歴のある中国人留学生にインタビュー調査を実施した結果、日本語の学習経験がある結果として、先行研究が指摘したように非学習者との区別が生じていることがわかる。先行研究では、日本に対する戦争をめぐるマイナスのイメージを形成する背景要因として歴史認識や歴史教育が挙げられている。今回の調査ではそのような結果が見られず、キーワードの出る頻度の高い順に上げると「まじめ、礼儀正しい、人に迷惑をかけない、細かい、融通がきかない、上下関係が厳しい」となっている。この結果は習得のルートと大きくかかわっていると言えよう。中国の大学で日本語専攻学習歴を持っていることの共通性から、教科書や日本語の授業、教師の影響が大きいと考えられる。

また、彼らは来日前に比べ認識の大きな転換は見られなかったが、細部の修正が見られることがわかる。その背景に中国における日本語専攻教育、つまり教科書や日本語の授業、教師の影響がもっとも大きいと考えられるほか、根元にある自国文化の影響や、時にはそれらの要素が混ざった形で影響を与えていると言えよう。以下はインタビューで出る頻度の高い言葉をキーワードに、「日本語学習の影響」「自文化からの影響」「接触で深まる理解」の3つの面から具体的な事例を見ていく。

## 5.1 日本語学習の影響

### ・日本語学習との関連

筆者の調査結果から、来日前の専攻学習者がどのように日本の情報を得ているかについては、日本語専攻教育の教科書及び授業と答えたのが16名のうち9名ともっとも多く、何年後も教科書の内容の一部を依然はっきり覚えているなど日本語専攻教育歴が与えた影響が大きいことが示されている。前述で取り上げた「りんご」の話について学習者は以下のように語っている。

Jさん<sup>5</sup>：大学二年の『総合日本語』という教科書で、お返しに関する内容があった。中国人留学生の李さんが自分で作った餃子を日本人の友達に上げたら、次の日にお返しとしてりんごを3つもらった。その当時の先生の説明とか印象に残っていないけど、とにかく「3つのりんご」のインパクトが大きい。自分の考えでは、たったの「3つ」のりんごはあまりにも少なく、人にあげるのは恥ずかしい。「3つのりんご」の話について、最初はとても理解できなかったが、今は納得できると思う。今の体験では、りんごを1つ、ケーキを1つもよくあることだから。一方で、お返しのタイミングで違和感を覚えたことがある。自分が餃子やたこ焼きを作ったら、研究室の人やバイト先の人に配るようにしている。その場で、「これ、お返し」と言われることがある。もらった直後のお返しはなんだか他人行儀で、絶対友達扱いされていないと感じた。でも、これが日本式の義理人情だと自分を納得させたら、理解できるような気がする。

異文化と接するときは、自文化が常に念頭にあり、それが「違い」を気づかせる原点となっている。確かに、中国人としての考えは、相手の気持ちにこたえ、お返しをするとしても、すぐにはなく、長い付き合いで見るのが一般的である。逆に、もらった直後に返すのは関係を損なう恐れがある。中国人の交友関係の一つの特徴は、その場その場で決着をつけるのではなく、友情が永遠に続いてほしいと願っていることである。一方で、日本人の行動には、藤本が指摘するように借り貸しの感覚と礼儀が結びついた独特の文化があるとされている。つまり、ものをもらったという「借り」を作りながら、何も返さない「義理を欠く」状態をそのままにしておけない、という心情から、贈った側の真意とは関わりなく、暗黙の礼儀の表れとして早めに「お返し」をするのである（藤本2011）。Jさんは「違い」の原因について、結果的に中日両国の文化の相違に帰しているが、日本語学習でこうした話題に触れたことが「違い」を認識する契機となっていることは言うまでもない。

### ・上下関係について

「上下関係」は来日後の話しで出る頻度の高いことばの1つで、対象者は大学生や大学院生であるため、大学内の先輩と後輩の関係に触れる内容が多い。

5 中国語原文については紙幅の都合から省略しているが、インフォーマントの喋った言葉をそのまま日本語訳して記述している。



Aさん：先輩と後輩の関係がはっきりしている。後輩が先輩をたて、先輩が後輩に対する面倒見がいい。以前知っていたが、実際の体験を通して、理解が深まった。部活は専攻も学年も違う学生が集まる小さい社会になっていると言え、縦社会の表れだと思う。

特に次のエピソードがとても印象深かった。それは自分からお土産を配った時の話だが、自分は近くにいる人からあげればよいと思って、親しい1年生にあげようとしたが、相手は「3年生の先輩にはあげたの」「はい、あげた」「2年生にもあげたの」「はい、あげた」とちゃんと確認してから、手に取ったというものである。

Nさん：大学で空手部に入っているが、練習している時に先生や先輩が入ってきたら、みんな集まって「おす」と挨拶する。また、練習後のまとめ会が終わったときは、先生が一番先その次は先輩、それから後輩と立ち上がる順番がある。そして、新人は掃除をすることになっている。

Jさん：ある日、親しくなった先輩から何か言われて、よく聞き取れなかった自分は自然に「なに？」と聞き返した。自分の性格の問題もあるかもしれないが、親しくなった以上、言葉遣いも最初のように気にしなくていいと判断した。それを聞いた先輩はとたんに「ナニって、先輩だよ。失礼だなあ」と怒った。もちろん、普段自分は先輩に対して「丁寧体（です・ます）」を使って、先輩は「普通体（だ）」だ。このことはとても印象深くて、先輩はいつまでたっても先輩だと先輩と後輩の關係の厳しさがわかったような気がする。

すでに述べたように、中国における日本語教育でよく取り上げられている題材であり、そこでは「上下關係が厳しいとよく言われる日本社会だが、戦後において大きく変わったにもかかわらず依然として日本的と言われるほど影響が残っている」などと説明されるのが一般的であり、Jさんの経験はその説明を追体験したものであるといえる。一方、中国出身者が特に厳しいと感じた要因の1つに自文化にないからだと考えられる。儒教の影響が強い中国ではかつては「長と幼」の秩序が厳しかったが、今では特別な場を除いて、だんだん緩んできている。それより、個人間の親密さによって対人關係における態度が決められていると言っていい。上記のJさんのエピソードにも言及がなされた。

Jさん：同じ研究室に自分より6つ上の中国人留学生がいるが、その人とはとても親しい。何でも話せるし、個人用品も断らずに使ったりしている。すると、研究室のわりと親しい日本人から「Jさん、中国では先輩や後輩という考え方はないの。先輩に対して敬語を使わなくてもいい？」と聞かれた。その方は中国語がわからないが、2人の付き合い方には気になっていたらしい。先輩と後輩の關係が厳しい日本では考えられないかもしれない。

一方、日本語教育の現場では、集団志向や上下關係はいわゆる日本人論の代表的な内容として常にとりあげられている。前記の日本事情全般を紹介する「日本概況」で教科書として広く

採択されている『日本』（外語教学与研究出版社2013）では、全9章からなっており、「歴史、自然、伝統文化、文学」などと並んで「日本人の行動様式」という章がある。そのなかで、「集団志向」「序列社会」の2項目は次のように記述されている。

日本人は「まとまって行動する」集団志向が強い。一つの集団に属することで具体的な利益だけでなく、精神的な安心も得られるからだ。（中略）村落では、おのずから上下の人間関係ができた。個人としての自覚は弱く、「集団の利害」が優先された。農耕社会と「家」に支えられた日本人は、集団に対する忠誠心は発達したが、個人を主張する観念は十分に養われなかった。

（中略）

しかし、近年、経済・産業のグローバル化に伴って、日本でも能力主義が台頭し、パート、アルバイト、派遣社員、契約社員などの非正規社員が急増。伝統的な終身雇用制や年功序列制は徐々に変質し、「個人」の意識の高まりとともに、日本人の「集団志向」も変わりつつある。（外語教学与研究出版社 2013:237）

このほか集団主義をめぐる記述は別の教科書でも複数見られ、インタビューでは話題として言及する専攻学習者が多かった。

#### ・曖昧さについて

Bさん：バイトや大学でTA、中国語講師の経験、またイベントで日本人と接することがある。回りの日本人はみんなの前で、自分の意見をはっきりと出さない、人の意見に従うことに気づいた。たとえば、みんなで食事会をする場合、直接話してもSNSなどで打ち合わせても意見がなかなかまとまらないことがよくある。反対する場合も、曖昧な返事が多い。中国人の場合、もっとストレートに意見を出す。これは日本人の曖昧さの表れだと理解している。

Jさん：バイト先の店長さんが店員のSNSのグループで、明日勤務する人が病気で休むから、かわりに来られる人がいるかと尋ねた。みな返事をしたが、日本に来たばかりの自分にとって、それらの返事の本当の意味を読み取れないことがある。自分の考えでは、行けないなら「すみません、明日予定が入っているから行けない」とかはっきり言えばいい。日本人のこの場合の返事は、「本当に本当に行きたいですが…」ではじまり、その後長い話が続く。その時点で自分は、「この人が行けそうで、よかった」と安心したところ、結局行けないのだ。このやり方は中国では誠意がないと思われるだろうが、日本では普通である。逆に、そう言わないと、空気が読めないと嫌われるかもしれない。

Iさん：サークルのイベントで、みんなで6枚のポスターから2枚を決めないといけなかった。このようなことは中国では、5分で決められるのではないと思うが、日本ではなかなか決められなくて、2時間もかかった。みんなは人の意見に対して「うん、

そうですね、どうしようかな」などのことばですごし、自分の意見をはっきりと出さない。これは集団意識が働いた結果だと思う。個人の意志で決めることは少なく、何でも集団で決めることにびっくりした。これにはメリットとデメリットがあると思う。メリットは、常に自分は集団の一員として安心感がある。デメリットは効率が悪い。

実際 I さんのこの解釈は、大瀧が以下のように指摘した事実と合致していると思われる。

日本では、議会や集会などの会議の場面で、1人1人の発言はあっても、それぞれの自己主張をぶつけ合う「対話」ではなく、モノローグが連鎖し、各成員は全体の中の自分の位置を測定し、自己の考え方を微調整していくやり方だ。日常生活でも同意見あるいは似かよった意見の場合、活発な意見交換が行われるが、対立する意見が出たとき、われわれは相手が親しい人なら親しいほど、反発する対話を避けようとする。せいぜい同意しない「ええ、まあそれはそうですがね…」ですごしてしまう。つまりここでも極めて日本的な互いの人間関係が損なわれない気遣いが働くのである。(大瀧1992)

日本では、コミュニケーションメンバーの間に長い間共有されているコンテクストがあり、言葉にしなくても互いのメッセージを読み取る能力に長けている。日本のようなハイコンテクストの国では、率直な物言いは時として失礼で、むしろ文脈からお互いに察して理解するコミュニケーションが評価される文化であるという認識は、日本語専攻教育を受けた多くの中国人留学生が共通して到達している認識であると推測される。

## 5.2 自文化からの影響

### ・自文化の違いからもたらされる認識の相違

同じ事象に対しても、見るほうの知見や生活体験によって違う、もしくは正反対な結果が出ることがある。調査協力者の中で、日本人の生活態度についての語りがあり、同じ日本滞在歴1年未満の20代の2名の女性が、それぞれ次のように語っている。

Mさん：一口に言って日本人は生活の水準が高いと思う。大学の近くに幼稚園があり、園児たちは毎日帽子をかぶり、かわいい制服姿で通園しているのをよく見かける。着るものから持ち物まですべてがきちんとしている。スーパーで出会った買い物客のおばあさんたちもいつもきれいにお化粧をして、おしゃれな日傘を差して、優雅に暮らしているんだなと感心している。大学生たちは女の子はもちろんお化粧をするし、よく見れば眉毛をそっている男の子もいる。

Nさん：来る前は日本式のファッションに非常にひかれていて、きっとみんなそうだと思っていた。実際今の大学の中で、きれいに着飾っている子が少なく、わけがわからないスタイルをしている学生をよく見かける。何だ？自分のいる中国のCQ（中国南部）という町のほうがおしゃれではないかとびっくりした。

上記の事例からは学習者の間で生活環境などによる個人差が大きいことが伺える。確かに2名はそれぞれ中国の北と南の都市から来ていて、中国において北と南では地域差があるのがよく知られている。また、Nさんの場合ファッションに特に関心を持ち、情報を多く持っていることから、来日前の期待が膨らみ、来日後抱いていたイメージがより現実的に修正されたと言える。

#### ・金銭感覚について

予備調査でこのような声があった。

予備調査対象者：もともと日本人に対して親切で、困っている人に手を差し伸べるという印象を持っている。留学先でこんなことがあった。タクシーで学校に着いたらタクシー代が足りないことに気づき、急いで知っている留学生係の方にすぐ返すからお金を貸してほしいと頼んだ。でも、その方はしばらく困った顔をされてから、運転手さんに領収書ももらい、後で払うのはどうかと提案だけしてくれた。困っているのに、どうしてお金を貸してくれないのかと理解できなかった。学校では学生にお金を貸してはいけないことになっているかもしれないが、もともとの日本人に対する親切な印象は少し変わった。

同様の事項をGさんも指摘している。

Gさん：はっきり言って、日本人は金銭的にはけちくさい。日本人の友達とはいつも割り勘だ。自分の考えでは、割り勘よりおごったり、おごられたりしたほうが人情味が出る。友達同士ならまだ理解できるが、不思議に思うのは恋人同士でも割り勘。たこ焼きぐらいでも割り勘なんてとても理解できない。自分の中国人の友達に日本人の彼氏ができたが、いつも割り勘のようだ。

日本のレストランなどでは、確かによく割り勘の光景が目に入る。食事の後、だれがいくらか平気で計算している日本人を見て、日本滞在期間の短い中国人には不思議に思うのも無理はないと思われる。中国では、普通食事を誘ったほうがおごることが暗黙の了解となっており、割り勘の光景は見られない。ご馳走になった方は、次の時に相手におごればいい。3、4人以上になると、順番におごるようになる。友達なのに、人の前でお金の計算をするのが恥ずかしいし、友達だからはっきり計算する必要もないという考え方が根強い。

#### ・自文化変容

Iさん：日本語を勉強し、日本人との付き合いを通して、言葉遣いや行動様式がかなり日本の影響を受けていると思う。婉曲や曖昧さは日本語や日本式発想の特徴の1つだと言える。それに対して、中国はストレートだと言えるかもしれない。中国で博士課程の先生に出した最初の依頼のメールで、とにかく丁寧な言葉遣いが必要だと意識し、日本語なら「お忙しい中、お邪魔して申し訳ありません」のような表現で気持ちを表すが、そのまま

中国語に訳すのもなんだか変だが、一方でそれを入れないと物足りないと言葉遣いで迷っていた。結局日本語で覚えた表現を無理やりに中国語に訳して出した。その後、面会していただき、いろいろ話をした後、先生は「今日の話で気持ちはよくわかるが、前のメールは言い回しが多すぎて、なんだか本気で入りたいとは思わなかったなあ」と言われた。

上記の事例のIさんは実際の日本での体験を通して、自文化と異文化との違いに気づき、自文化についても考えるようになった。新しい環境に入ったとき、まず、そこで生きるために適応し、同化しようと努力する。その次に、自文化に目を向け、考えるきっかけとなるとよく言われる。異文化体験は変容のチャンスをもたらすものとされている。変容はすべて自文化を相対化する方向に向かっているとは限らないが、「違い」から学び、自文化を見つめ直し、さらに自文化が変わっていく可能性を見出すことが大切だと思われる。

### 5.3 接触で深まる理解

#### ・対人関係の親切さと心的距離について

来日する前の日本人に対する認識について聞いたところ、出る頻度の高いことばに「親切、優しい、礼儀正しい」という意味合いのことばがあげられる。この印象は教科書のほか日本語教師や来日経験のある人に由来することが多い。予備調査では次のような声があった。「留学に行ってきた今考えると、行く前はプラスのイメージが主となるのは先生や留学経験を持っている先輩たちが日本のいい面しか語ってくれなかったからだ」。実際の異文化接触を通して、もともとの単一的なイメージが複雑化すると言えるだろう。実際体験した後の「親切さ」について見ていこう。まず、もともとのポジティブなイメージは見知らぬ人同士の関係では維持される傾向が見られる。

Mさん：自分は一人で熊本城観光に行った時のことだが、地震の被害で一部閉鎖になっているので、見られなくて残念だった。私の話を聞いた警備のおじさんはとても親切で、せっかく来たのもう少し近寄って見られるようにと地図で別のルートを教えてくれた。とても感動した。また、大阪で地下鉄の乗り方がよくわからない自分を見て、やはり親切なおじさんがいろいろ教えてくれた。特に向こうから困っている自分に話しかけてくれたので、助かった。

Nさん：道などでお掃除とかの作業をしている人と目が合ったら、会釈したり「おはようございます」と挨拶したりしてくれる。しないと気まずいような、習慣になっているような感じがする。自分もほかの人も愉快的気分になるように人間関係を常に重視しているからだと思う。

一方、知り合いからよりいっそう親しい間柄に踏み込もうとする段階では難しさを感じることが多い。

Hさん：日本に来て2年以上たったが、学校とバイトでしか日本人と接することはない。バイトで親しくなった女の子とSNSの連絡先を交換し、世間話などのおしゃべりもするが、いっしょに食事をしたり遊んだりすることはない。

Jさん：周りの日本人とは親しみにくいと感じた。たとえば、バイト先で中国人がいたら、中国人同士で親しくなる。今自分しかいないから、年の近い契約社員の女の子とわりと親しくなり、休憩時間にいっしょに散歩したりもするが、何でも話せる仲でもない。日本人の知り合いとはSNSで写真を送ったりするようなことはしない。いわゆる「友達」でも、中国の考えでは、「うわべだけの付き合い」かな。常に距離感を感じ、溶け込みにくいと感じた。

「親切さ」に関しては、留学生の日本人イメージの先駆的研究である岩男・萩原（1988）が、「日本人は『親切』という評価は多くの留学生に共通している。とかく日本人は外国人を特別扱いにしがちであり、来日して間もない頃には自分たちに示される日本人の厚情に感銘を受ける留学生は少なくない。しかし日本での生活が長くなり、日本人とのより深い交流を求めようになると外国人に対する日本社会の閉鎖性、『見えない壁』の存在が明らかになりやすくなる」（岩男・萩原1988：165）と指摘したような結果になったわけである。

また、Hさんの場合「優しさについて、最初来た時、道を尋ねたりしたときの感想は日本人は確かに心が優しくて、親切だと思った。地方都市の鹿児島だから特にこう感じたかもしれない。最初に行ったのは東京だったら、違ってくるかもしれない」と地域的な特徴として解釈するケースも見られる。

#### ・滞在期間との関連

岩男・萩原（1988）は、滞日期間とともに「留学生に対する日本人の態度」に不満を持ちやすくなる傾向はアジア系、欧米系の留学生に共通し、「親切」、「つきあいやすい」という「親和性」に関するアジア系留学生の評価は滞日期間とともに直線的に低下する傾向があることを指摘している。今回の調査では、滞在期間が長ければ長いほど「違い」に対する寛容度が高まる傾向が見られた。「違うけれど理解できる」という表現が目立っている。滞日期間が短い場合、目にするのはすべてだと決め付ける傾向がある。時間がたつにつれて、最初は理解できなかったが、時間がたつにつれて理解できるようになったケースが多い。

Jさん：大学院に申し込んだ時のことだ。同時にいくつかの大学に申し込み、オーケーと返事をくれた大学に、自分の原因で行けなくなった。自分は受け入れてくれた先生にとっても申し訳なく思い、お詫びの手紙とお菓子を送った。すると、その先生から「迷惑だ」という旨のメールをもらい、お菓子も送り返された。ばつが悪い？むしゃくしゃする？複雑な気持ちだった。でも、それはまだ日本に来て半年しか経っていない頃のことだ。今だったら、絶対お菓子を送らないと思う。今はこのようなやり方は確かに相手にとって迷惑だし、その先生の気持ちがわかると思う。これは旅行や帰国した時のお土産とぜんぜん

違うから。

#### ・異なる立場からの体験談

Eさん：親切だとか、人に迷惑をかけない、時間厳守などよく言われる日本人のイメージは絶対的ではないと感じた。普段日本人と接することが少ないため、日本人社会に溶け込むことは難しいと感じた。中国にいたとき、交流イベントで接した日本人大学生は親切で周りの中国人との交流意欲が旺盛だが、日本に来てからなんだか冷たく感じた。もちろん、コンビニの店長さんとか屋久島のホームステイのオーナーとか中国のことが好きで親切にしてくれる方もいる。

異文化コミュニケーション理論では、異文化コミュニケーションが発生する際、自文化内であるのか相手文化内であるのかによって有利不利が決まる場合が多いと解釈している。自文化は自分に有利に働くが、相手文化は相手に有利に働く。また、参与者の数などの要素による力関係も発生するのが普通であり、コミュニケーションの目的とも大きくかわる。(石井・久米・遠山2001: 132-133) 上記の事例では、Eさんの自文化内で発生した時、つまり少人数の日本人学生が友好交流のために訪中する場において親切だったが、Eさんが一人の留学生として相手の文化内に入ると変わってきた。このなかには、たまたま出会った日本人学生という偶然性が考えられるほか、少人数の日本人学生は交流のために中国を訪問しているという立場(参与者要素)からも理解できる。

## 6. まとめと課題

本論では、中国の大学で日本語専攻学習歴がある学習者の来日後の直接的文化接触経験を中心に質的調査を行った。先行研究においては中国人留学生を一括りに扱っているケースが多いなか、本論では来日前の日本語専攻教育ですでに日本に対する認識が形成されている学習者に焦点をあて、来日前のインプットと来日後の実体験を結び付けて考察してきた。さらに先行研究で課題として残されている実証的研究が足りないことを踏まえ、事例を通して具体的に見てきた。

日本語専攻教育でインプットされた知識が実体験で検証され、特に「上下関係」や「義理人情」などよく取り上げられる内容について身をもって経験し、「理論というより身近にあることだ」と理解が深まったと言えよう。いわゆる「上下関係」は上司と部下の間のような特定の場合だけでなく、サークル活動やバイト先のような身近なところでもさまざまな形で存在していると従来持っていた認識の修正ができた。そして、日本人に対するイメージのうち「優しい、親切」という単一的なものが、「対人関係の親切さ」以外に心的距離感も実感し、そこから日本人社会の閉鎖性の存在も確認できた。一方、「金銭感覚」などにおいては日本語専攻教育との結びつきが薄い「自文化の相対化」の問題からきたと思われる認識もうかがえる。自文化を基準に考えれば納得のいかないことが実際に異文化に見られる場合、差異を認めた上で異文化理解をすることが必要になっている。逆に言語知識を主とする日本語専攻教育にこれに関する

内容が欠けていることも示唆されている。

インタビューの内容は対人関係、学校生活や社会生活の一部しかも日本語専攻教育でとりわけ話題として取り上げられる内容に集中する傾向が見られる。これはある文化の対人コミュニケーションの特徴は、映像や活字などの媒体を通じては伝達されにくいものであり、実際の接触で対面の機会があってはじめて実感する部分が多いからだといえる。

一方で、歴史的・社会的背景知識、伝統文化などは大学の日本語専攻教育では基本教養として欠かせないが、学生生活では実感しにくいのでインタビューでは欠けている傾向が見られる。その部分是在日期間が長くなるにつれて自然に知識が増えるとは限らない。実際の接触がない限り、もともと持っている日本語学習でインプットされた知識を持ち続けることになると推測できる。

本研究からは、文化接触特に来日後の接触が日本語専攻学習でいったん形成された日本認識の修正に影響を与えていることが伺える。個人差を除き、そのプロセスはおおむね「日本語学習前（自国）」「日本語学習中（自国）」「来日後」の段階が考えられる。今回の調査対象者の日本滞在期間は平均21ヶ月だが、最大値の48ヶ月と最小値の2ヶ月の間には相当な差があり、それによる違いが示唆されている。つまり、接触のプロセスに応じて各段階の特徴を調査し明らかにする必要があるだろう。これを今後の課題として、引き続き観察、研究を深めたい。

## 参考文献

- 安龍洙（2010）「外国人の対日観に関する研究—中国人非正規留学生の場合—」『茨城大学留学生センター紀要』8, 1-17
- 石井敏・久米昭元・遠山淳（2001）『異文化コミュニケーションの理論』有斐閣ブックス
- 岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生社会心理学的分析』勁草書房
- 大瀧敏夫（1992）「異文化コミュニケーション—言語行動及び非言語行動の比較—」『金沢大学文学部論集. 文学科編』12, 55-89
- 大森和夫・大森弘子（2013）『日本』外語教学与研究出版社
- 夏素彦（2010）「中国における日本語専攻学習者の日本人イメージ：日本語学習動機との関連を中心に」『言語文化と日本語教育』39号, 112-121
- 葛文綺（1999）「留学生の異文化適応に関する研究—来日目的、対日イメージと適応度の関連を中心に—」『名古屋大学教育学部紀要, 心理学』46, 287-297, 1999-08-27
- 葛文綺（2003）「留学前後における対ホスト国イメージの変化に関する研究—中国人留学生と日本人留学生との比較を通して—」『異文化コミュニケーション』6, 117-130,
- 教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組（2000）『高等院校日語專業高年級階段教学大綱』大連理工大学出版社
- 教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組（2001）『高等院校日語專業基礎階段教学大綱（修訂本）』大連理工大学出版社
- 小松翠（2016）「中国人留学生の友人関係不満に関する原因帰属と日本人イメージの関連について」『高等教育と学生支援』7, 128-139
- 国際交流基金（2015）「2015年度日本語教育機関調査結果」<https://www.jpff.go.jp/j/project/>



- japanese/survey/area/country/2017/china.html (最終閲覧日: 2018年10月25日)
- 阪田雪子・守屋三千代 (2008) 「日本語教科書の課題と提言—『総合日語』執筆・編集を通じて—」『アジア太平洋地域における日本語教育 (香港日本語教育研究会)』2, 344-353
- 孫怡 (2010) 「在日中国人留学生の異文化適応に関する研究: パーソナリティ特性の視点から」『人間文化創成科学論叢』12, 241-248
- 張勇 (2013) 「日本語学習者の異文化態度に関する意識調査—日本語専攻の中国人大学生を対象に—」『日本語教育』154, 100-114
- 鄭玉善 (2008) 「中国人留学生の来日前の対日観調査報告とその要因考察—名古屋大学在学中の中国人留学生への調査に基づいて—」『名古屋大学留学生センター紀要』6, 5-16
- 日本学生支援機構 (2017) 「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2017/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/index.html) (最終閲覧日: 2018年8月3日)
- 藤本久司 (2011) 「文化の種類とコミュニケーションギャップ」『人文論叢 (三重大学)』28, 145-155
- 彭広陸・守屋三千代 (2004-2006年) 『総合日語』(全4冊) 北京大学出版社
- 見城悌治 (2007) 「現代中国における日本語専攻大学生の『日本』イメージ」『国際教育』第1号, 1-20
- 見城悌治・三村達也 (2013) 「現代中国における大学生向け『日本事情』テキストに見る日本像」『国際教育』6, 55-77
- 楊霜・橋元良明 (2010) 「中国におけるメディアの多元化と日本人イメージの変化—その変化に内在する「人間本位」意識のあり方を中心に—」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』79, 47-62
- 李洋陽 (2006) 「中国人の日本人イメージに見るメディアの影響—北京での大学生調査の結果から」『マス・コミュニケーション研究』69, 22-40